崎尾教授、佐渡国際トライアスロンに出場!

人気生産物『乾燥原木椎茸』の袋詰め作業

野営方法やロープワークの習得を目指す実習もあります

新潟大学演習林ニュースレター

Niigata University Forest Newsletter

新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター 佐渡ステーション

第５号　2016年 9月

教育関係共同利用拠点第二期認定の報告

今年度は、平成 24 年度に文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定されてより最終年度の 5 年目になります。これまでの実績を踏まえ、来年度以降の拠点継続を申請しましたところ、7 月 29 日付で平成 29 年度より 5 年間の期間で再認定されました。来年度より拠点名を「佐渡島の多様な自然環境を利用した教育関係共同利用拠点」と改めます。これまでの佐渡ステーションのご利用やご支援に心から感謝いたしますとともに、今後とも変わらぬご愛顧のほど、よろしくお願いいたします。

（佐渡ステーション教職員一同）

国際植生学会(IAVS)第59回シンポジウム in ピレノポリス, ブラジル

国際植生学会で 6 月 13 日からブラジルを訪れました。首都ブラジリアから西に 150km のピレノポリスで学会は行われました。時差は日本と 12 時間、季節は乾季の始まりで、朝夕は 10 度くらいまで冷え込む日もありますが、日中は 30 度を超えてかなり暑いです。しかし、湿度が低いのでそれほど暑さを感じませんでした。

ブラジルバオバブの木と呼ばれる *Cavanillesia umbellata*

発表は、Are the long-term flowering patterns of Fraxinus platypoda synchronized between males and females? という題で、シオジの雌雄異株個体で開花が 26 年間でどのように変化してきたかを、温暖化と絡めて発表しました。さすがに 26 年間のデータの蓄積は重みがあったようで、驚歎のため息が出ました。質問も多くありましたが、英語力の未熟さもあり質疑応答には苦労しました。学生の皆さんは、ぜひ今のうちから英会話技術を磨いてください。

エクスカーションでは、様々なセラードの植生を見学してきました。セラードとは、草原の中に低木が点々と分布しているサバンナのような景観です。日本とは全く異なる植生で、植物も全て初めて見るものばかりで、感激の連続です。参加者の多くは、植生学者なので一つ一つの植物の学名を、地元の研究者から聞き出そうと必死です。また、植物写真を撮り続けている研究者もいました。私は、セラードの植生が、火災や洪水、また人為的にどのような影響を持って保たれているかについて興味がありました。

セラードには何種類かの植生があります。常緑樹林、落葉樹林、半落葉樹林、岩地草原（Rocky grasslands)、岩地セラード（Rocky cerrado)、ヤシ類湿地（Palm swamp)，水辺植生（Gallery forest）など多様な生態系がモザイク状に分布しています。多くの植生が数年に一度の火災によって更新することで、多様性が保たれているということです。これらの多くの植物は、硬い葉を持っていたり、葉がトゲになっていたり、多肉植物であったり、乾燥に対して強い耐性を兼ね備えています。また、幹をコルク化するなど火災に耐性を持っている樹木もあります。一方で渓流沿いなどの水辺には、ヤシ類、シダ類、モウセンゴケなども分布しています。教科書ではなんとなく学んでいた南米のセラードを目の当たりに見た今回の学会は、私の研究意欲を一段と刺激してくれました。

（教授　崎尾均）

セラード植生の一つで、水辺に沿って形成されるgallery forest と呼ばれる。ヤシ科の *Mauritia flexuosa* が優占している。

第2回 新潟大学佐渡3施設による森里海公開シンポジウム

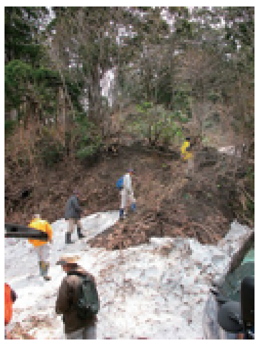
2月20日、トキ交流会館（佐渡市新穂）で第2回新潟大学佐渡3施設合同シンポジウムを開催いたしました。シンポジウムでは、佐渡島に配置されている新潟大学の3施設（『森』農学部附属フィールド科学教育研究センター佐渡ステーション、『里』朱鷺・自然再生学研究センター、『海』理学部附属臨海実験所）でどのような研究を行っているのか、島内の方達に向け、発表しました。

発表に熱心に耳を傾ける聴衆

シンポジウム当日は、島内から多くの方達が参加して下さり、参加者は約70名となりました。研究発表では、活発な質疑応答もみられ、住民の自然に対する関心の高さが伺えました。会場外のホールでは、佐渡ステーションで作成している木工品の展示販売も行いました。こちらも参加者の興味を引いたようで、作り手である技術職員に材の種類、耐久性などについて尋ねる姿がみられました。本シンポジウムの様子は、後日、新潟日報に掲載されました（新潟日報2016年3月3日掲載）。

天然材の形や木目を活かした木工品

2016年山開き


例年の半分以下だった残雪

佐渡演習林、恒例行事の山開きを4月22、23日に行いました。今年は例年よりも雪解けが早く、山頂付近のスギ天然林でわずかに積雪が残っているのみでした。

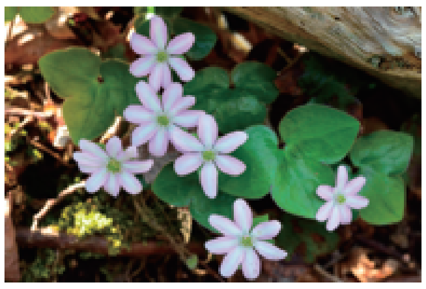
今年度の山開きでは、周辺集落の代表者、演習林関係者に加え、佐渡の蔵元の方達を招待しました。佐渡演習林の代表的な樹種であるスギと日本酒は火桶、杉玉、樽酒など昔から切っても切れない関係です。現在、演習林ではスギなどの材で木工品を作成していますが、地元の蔵元でも材を有効活用できないかと考えております。今回の山開きがきっかけになり、真野鶴（尾畑酒造株式会社）に学校蔵プロジェクトで使用する天然スギ材を提供させていただきました。

今後も蔵元に限らず、佐渡演習林の材や木工品を地元の皆さまにご利用いただければと思います。

恒例の山菜天ぷらは、日本酒にもぴったり!

シリーズ

研究紹介③ 自生地の環境とオオミスミソウ


オオミスミソウ(*Hepatica nobilis*)

オオミスミソウは“雪割草”の名で知られ、古くから親しまれている山野草のひとつです。佐渡島は代表的な自生地のひとつで、開花期の早春には、フクジュソウやキクザキイチゲなどの春植物とともに島中の山地を彩ります。

一般的に、オオミスミソウは落葉樹林下が生息地とされています。落葉樹林では林冠木の開葉・落葉によって光環境が大きく季節変動し、特に春と秋に強い光が林床に差し込みますが、常緑樹林では年間を通して林床に光が届きにくい環境になります。こうした季節的強光の有無は林床植物の分布を大きく左右します。例えば、春先のみ地上に姿を現す春植物のような種群は、年中暗い常緑樹林下ではほとんど生育できません。しかし、オオミスミソウはヒノキアスナロやヒノキなど常緑針葉樹林の林床でも群生し、花を咲かせています。 自ら移動できない植物は、環境の変化に対応して形質や生態を変化させ、生存を図っています。様々な森林に自生しているオオミスミソウも、自生地の環境によって性質を変化させて生きていると考えられます。そこで私の研究では、自生地の森林タイプ（落葉樹林・ヒノキ林・ヒノキアスナロ林）間におけるオオミスミソウの生態的差異を、季節変動も合わせて調べています。

（佐渡研究室　修士1年　武藤公樹）

お知らせ　第3回 新潟大学佐渡3施設 森里海公開シンポジウム

日時：2016年11月19日(土)13時～（※時間は変更になる可能性があります。）
場所：あいぽーと佐渡　多目的ホール
（佐渡市両津夷384-11）
内容：基調講演 中村 太士(北海道大学農学部 教授)
※詳細は決まり次第、各施設のホームページでお知らせいたします。

共同利用実習募集中!

佐渡ステーションでは、共同利用実習、演習林での調査・研究の受け入れを随時行っています。お気軽にご相談ください。

実習の様子などをブログで紹介しています
佐渡研究室　検索

編集後記：本号よりニュースレターの書式を変更いたしました。少しは読みやすくなっていれば良いのですが･･･。現在、佐渡演習林では実習まっさかり!次号では実習の様子もたくさんお伝えしたいと思います。（特任助手　菅尚子）

新潟大学演習林ニュースレター
編集・発行：新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター 佐渡ステーション
〒952-2206 新潟県佐渡市小田94-2
tel: 0259-78-2613 fax: 0259-78-2929 e-mail: sadoken2011@gmail.com
ホームページ http://www.agr.niigata-u.ac.jp/fc/sado_html/sado_index.html

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。